

No.1 2009

---

---

# 文学館研究

---

文学館の自己認識とその領域 ..... 岡野裕行 (1)

編集・発行

文学館研究会

---

# 文学館研究

第 1 号

2009 年 10 月 10 日発行

編集・発行

文学館研究会（代表 岡野裕行）

<http://www.literarymuseum.net/>

[info@literarymuseum.net](mailto:info@literarymuseum.net)

# 文学館の自己認識とその領域

おか の ひろゆき  
岡野 裕行

(文学館研究会代表)

## 目次

1. はじめに .....	1
2. 文学館の自己認識 .....	2
2.1 全国文学館協議会の見解 .....	2
2.2 中村稔の文学館認識 .....	3
2.3 現場レベルの文学館認識 .....	4
3. 文学館の領域 .....	5
3.1 博物館の系統 .....	5
3.2 図書館の系統 .....	6
3.3 文学館の位置付け .....	6
3.4 文学館認識の再検討 .....	7
3.5 博物館認識の再検討 .....	7
4. 当山質問の再検討 .....	8
4.1 繰り返される領域問題 .....	8
4.2 三分法の限界 .....	9
4.3 新しい文学館認識の確立 .....	10
5. まとめ .....	10
5.1 本稿の結論 .....	10
5.2 今後の展望 .....	12
5.3 文学館研究の「今後」とは .....	12
5.4 中村稔の「自負」について .....	13
6. おわりに .....	14
謝辞 .....	15
註 .....	15

## 1. はじめに

筆者は2009年2月に文学館に関する小稿を  
発表した<sup>1)</sup>。それに対し、當山日出夫が翌3月  
に以下のような質問を寄せている<sup>2)</sup>。

第一に、文学館というのは、「図書館」  
「博物館」「文書館・資料館」、いずれである  
のか。とりあえず、法的な位置づけは別に  
して、文学館の設立・運営主体がどのよう  
に自己認識しているのか。図書館(ライブラ  
リ)と、文書館(アーカイブズ)では、「本」の  
とりあつかいが異なる。ライブラリは、本の  
ケースやカバーは取り除く。本を単体にする。  
しかし、アーカイブズでは、本のケース  
やカバーも残さなければならない。また、そ  
の作家の本棚が再構成できるように整理す  
る必要がある。

このあたりが、文学館の今後について考  
えるポイントではなかろうか。

この當山の質問を要約すると、以下の2点に  
整理できる。

- A. 文学館という施設は博物館、図書館、文  
書館のうちのどの領域に含まれるのか。

B. 文学館の設立・運営主体は文学館をどのように自己認識しているのか。

本稿では當山によるこの二つの質問(以下「當山質問」と略記する)に回答する形で、今日における文学館の自己認識とその領域について考えてみたい。

## 2. 文学館の自己認識

まずは當山質問 B について検討する。當山の問題意識は比較的新しいもののように思えるが、これに類似した疑問は既に 1990 年代半ばから出てきていることが確認できる。そのような疑問に対する回答も同時期以降にいくつか提出されており、當山の問題意識自体はそれほど目新しいものではない。

### 2.1 全国文学館協議会の見解

文学館の諸問題を現場の職員同士で検討するために発足した業界団体として、1995 年に全国文学館協議会が設立されている。同協議会ではこの十数年の間に、文学館に関するさまざまな問題についての議論を積み重ねてきている。筆者は 2006 年に発表した博士論文のなかで同協議会の活動の概略をまとめており、そのなかで文学館の自己認識の変遷をまとめている<sup>3)</sup>。その初期の事例には、同協議会発足直後の 1996 年に日本現代詩歌文学館(岩手県)の豊泉豪が以下のように述べたものがある<sup>4)</sup>。

今後この協議会において、博物館でも図書館でもない、「文学館」という大きな枠組みを作っていくのだとすれば、博物館や図書館の理念がそれぞれ博物館法、図書館法によって定められているのと同様に、

(文学館法の制定は望めないまでも)文学館の理念を明確にすることがその手始めの仕事となるでしょう。現状ではそれぞれの館によって事情がまちまちで一概には言えません。文学館の機能は大きく社会教育施設(観光施設であることも含めて)としての博物館的機能と、研究施設としての専門図書館的機能の二つに分類されると思います。

以上のように、既に 1996 年の時点において、文学館は図書館と博物館の両方の機能を重視しなければならないという問題提起がなされていたことが確認できる。これに続く同協議会の会報誌『全国文学館協議会会報』には、この豊泉の意見を否定するような議論は見られないため、この意見が発足時点における同協議会関係者間の共通認識になったと考えられる。特に、豊泉の意見に見られる博物館的機能と図書館的機能という二つの表現は、同協議会関係者の間で重要なキーワードとして受け継がれていく。例えば、2001 年に同協議会会長の中村稔は以下のように述べている<sup>5)</sup>。

文学館の本来の使命は、文学資料、すなわち、肉筆原稿、初出誌、初版本、推敲をへた後日の刊本、日記、書簡、創作ノート、書き入れ本その他の蔵書、さらに研究書等をひろく収集、保存、整理し、研究者等の閲覧に供することにある。きわめて限られた少数の読者のための図書館的機能を果たすことが本来、文学館の役割である。(中略)

だが、今日、多くの文学館に求められているのは、文学館の収蔵品をひろく展示し、公衆の閲覧に供する、いわば博物館的機

能を果たすことである。

中村も豊泉と同様に図書館的機能、博物館的機能という二つの表現を用いることで、文学館という施設を説明しようとしている。中村は以上に続け、“文学館に求められている特殊な図書館としての機能と博物館としての機能との矛盾をいかに克服し、両立させるか、が文学館の課題であり、この課題の解決をさぐらない限り、文学館に未来はない”とも述べている<sup>6)</sup>。いずれの意見に関しても、文学館を既存の図書館や博物館という枠組みに押し込めようとはせず、その両方の立場を尊重し、どちらか一方の領域に収めないような注意が払われている。

そこには多様なアプローチから迫ることで複眼的な視点を用意するという意図が含まれていると考えられるが、別の見方をすれば、文学館の対象領域を二つの側面から見ることによってその機能をより曖昧化し、はっきりと断定することを避けざるを得ない事情があると推測できる。それはつまり、いくら図書館や博物館という用語で厳密に文学館の対象領域を捉えようとしても、その二つの用語のうち的一方だけでは、どちらを選択するにしても不十分な結果にしかならないことが容易に予想されるためである。すなわち、図書館という用語、あるいは博物館という用語だけでは表現しきれない部分がどうしても残るために、現場の状況を知悉している文学館関係者の立場としては、そのような曖昧な表現を採用せざるを得ないものと考えられる。この問題については、當山質問 A を取り上げる形で後述する。

## 2.2 中村稔の文学館認識

さて、それに先立つこと1997年に、中村は以下のようにも述べている<sup>7)</sup>。

多くの文学館において、資料の展示を中心とする啓蒙、普及が文学館の主要な目的とされている。展示は通常、原稿、日記、書簡、初出誌、初版本、色紙・短冊等の書跡、さらに写真等により構成される。文学の研究資料としての価値はともかくとして、色紙・短冊等の書跡や写真等は展示の素材としては欠かせないものである。これらはとりあげられている文学者に関心を持つ者にとってはきわめて興味深いものであるのがふつうである。しかし、その文学者の作品をほとんど知らない、あるいは読んだことのない来館者に対して、その文学者の理解に資し、あるいは関心をよびおこすような展示は至難である。この難しさがまた、文学者の来館者数が限られる理由となっていることも否定できない。文学館への来館者が少ないことは、多くのばあい、展示が文学館の存在を意義あるものとするには足りないことを意味するであろう。

その他、多くの文学館、ことにある地域の文学館にはその地域の文学、文化活動の核ないし発信基地としての役割、あるいは、個人の記念館の場合であれば、その文学者個人の顕彰といった役割も担っているが、これらはあくまで副次的なものにすぎない。そういう活動に限れば、何も文学館である必要はないからである。

このような中村の意見の要点は、以下のようにまとめることができる。

- ①文学館の主要な目的は資料の展示による文学者・文学作品の啓蒙や普及である。
- ②しかし、それを展示において実現するのは難しく、それが来館者数の少なさに影響を

及ぼしている。

- ③文学館への来館者は少ないが、これは展示が文学館の存在を意義あるものとするには不十分なためである。
- ④地域の文学館の場合、その地域の文学活動の発信基地としての役割を担っている。
- ⑤個人の記念館の場合、その文学者個人の顕彰の意味を持っている。しかし、顕彰が目的ならば文学館という形態である必要はない。

このうち、③で指摘された展示機能の不十分な点の指摘は重要である。③と併せ、先に引用した“きわめて限られた少数の読者のための図書館的機能を果たすことが本来、文学館の役割である”というような図書館としての機能を優先する中村の意見を総合して考えてみると、中村個人としては文学館という施設について、展示などの博物館的機能よりも図書館的機能を重視する意見を持っていることが窺える。

### 2.3 現場レベルの文学館認識

ただしここで注意したいのは、中村の意見は全国文学館協議会の総意ではなく、あくまで個人レベルの見解でしかないということである。中村個人の文学館認識と現場レベルの文学館認識の間には、少なからず温度差が感じ取れる。例えばこのような中村の意見に対し、豊泉は“専門図書館と博物館、この文学館が持つ二つの機能を過不足無く両立させることは非常に難しいわけですが、だからと言って私は二つの機能は決して相反するものではない”と述べている<sup>8)</sup>。あるいはまた、世田谷文学館(東京都)の学芸課長の生田美秋は中村の論考に多くの点で共感を示す一方で、日本近代文学館(東京都)や俳句文学館(東京都)が図書館的機能を重視し

ているのに対し、世田谷文学館のような地域に根ざす文学館はそれと同じくらい“博物館としての文学館”を重視していると述べ、中村の意見がさまざまな文学館の性質の違いに触れておらず、図書館的機能を重視した意見であるという批判を提出している<sup>9)</sup>。特に生田の意見は文学館の理念の面において、中村の意見と真っ向から対立するものと見なすことができる。

文学館関係者の中でこのような温度差が生じてしまう背景には、そもそも中村が関係している日本近代文学館が近代文学を対象とした専門図書館として構想・設立されたという事情が深く絡んでいるだろう。その点で、中村の意見は実に日本近代文学館の関係者らしい意見と評価できる。それに対し、生田の所属する世田谷文学館では博物館としての機能を重視することが強調されている。これは両者の出発点における文学館の理念がそもそも異なっているがゆえに、その理念をもとに実現化された運営形態にも明確な違いが見られるということである。つまり、図書館を目指すか博物館を目指すかという文学館の活動スタンスは、そもそも文学館の出発点における理念の違いによって明確に方向性が決定されていることになる。

この点について筆者は、“文学の博物館を作ろうとした結果として文学館と呼ばれるようになるか、あるいは文学の図書館を作ろうとした結果として文学館と呼ばれるようになるかは、各文学館の設立当初の理念の違いによるだろう。ならば、そのような二種類の成り立ちによる施設のいずれもが、単純に文学館という用語で呼ばれてしまう状況に注意を払うことは重要である。その点を意識しない限り、文学館についての議論が食い違うおそれは常につきまとう”と述べ、「文学博物館」と「文学図書館」という二つの成り立ちの違いを指摘している<sup>10)</sup>。文学館についての議論

が関係者同士でも食い違うことが多いのは、そもその活動の理念が異なっていることに加え、それに大きく依存する実際の運営形態にも違いが見られるためである。既に全国各地の文学館の活動が軌道に乗り、それぞれに独自の歴史を積み重ねている今日においては、文学館という用語が抱える意味の曖昧性と、それに起因する議論の食い違いの問題は今後も残り続けることが予想される。しかし、文学館についての議論を進めるに際しては、少なくとも上記の理念と運営形態の違いは念頭に入れておかなければならないだろう。

以上のように、少なくとも現場レベルの職員の立場においても、文学館を図書館あるいは博物館のどちらか一方の領域に押し込めるような意見を探すことはできない。むしろ設立における理念の違いがあるために、現場レベルの感覚においてどちらか一方を尊重するような意見に収束し、それが文学館関係者の共通認識として一般化されていくような事態は今後も起こりえないと考えられる。

### 3. 文学館の領域

次に當山質問 A に答える形で文学館の領域について考える。前述したように、文学館には一般に博物館的機能と図書館的機能という二つの見方が存在する。このような区分は単に机上の学問から生み出された理論ではなく、現場レベルの職員の実感や、設置に際しての管理運営団体レベルの具体的な取り組みから生み出された概念提起である。それらを参考にすると、文学館は博物館としての機能を重視するものと図書館としての機能を重視するものとに明白に二分されることが分かる。このことは、それぞれの文学館の管理運営団体やその設立の目的を概

観することで明らかになる。

#### 3.1 博物館の系統

博物館の系統に属する代表的な事例としては、前述の生田が強調していた世田谷文学館がある<sup>11)</sup>。同館は世田谷美術館などの施設とともに財団法人せたがや文化財団(前身は世田谷美術振興財団)によって管理運営されており、“区民と密接な連携を保ちながら専門性の高い芸術・文化事業を展開するとともに、区民の主體的な地域文化創造活動や国際交流等の市民活動を支援する環境を提供していく”ことが活動の目的とされている<sup>12)</sup>。文学を中心とした文化事業を積極的に推進するため、単なる文学の専門図書館という役割ではなく、むしろ博物館としての機能を重視しつつ地域文化創造活動を目指すなど、市民の生活に根ざした活動の展開が目指されている。この点については、先に引用した生田が“博物館としての文学館”と主張していた内容とも符合していることが確認できる<sup>13)</sup>。

そのほかにも設立当初から博物館の一種として形作られた文学館は存在しており、例えば古河文学館(茨城県)などもこの系統に該当する<sup>14)</sup>。古河文学館はもともと古河歴史博物館の分館として設立されたものであり、自治体内での組織体制も古河歴史博物館の下に位置付けられていたものである<sup>15)</sup>。現在の古河文学館は市町村合併の影響もあり、古河歴史博物館の分館という位置付けから独立した組織へと変更されたため、古河歴史博物館と並列した形で教育委員会文化部の下に位置付けられている。一方、公共図書館である古河図書館は長年にわたって教育委員会社会教育部の下に位置付けられており、古河文学館や古河歴史博物館との組織上の繋がりはそれほど強くない。つまり、古河文学館の歴史は博物館の系統に位置付けられ

ることに始まっており、今日に至るまで博物館に相当する施設として活動を続けている。

### 3.2 図書館の系統

図書館の系統に属するものには、前述した日本近代文学館がその代表的な事例となる<sup>16)</sup>。文学の専門図書館としての機能を目指した文学館としては同館がもっとも歴史が古く、その規模は今日においても日本最大のものであり、名実ともに日本の文学館を代表する存在である。同館の設立に際して東京都立日比谷図書館から移籍した大久保乙彦が、“私のいる図書館は、日本の近代文学に関する図書雑誌その他原稿書簡墨跡遺品や写真などの資料をできるだけ網羅的に蒐めて、それらをぜったいに無くさないように、いためないように、できるだけ原形を損ねないように保存することを第一の目的としているところです。しかし博物館でなく図書館なのでひろく一般に閲覧利用されています。いわば利用のために保存を第一義と考える専門図書館の類です”と述べているように、文学資料を対象とした専門図書館としての効率的な業務確立のための試行錯誤が絶えず行われている<sup>17)</sup>。

そのほかの事例としては、本郷図書館鷗外記念室(東京都)を挙げることができる<sup>18)</sup>。これはほとんど鷗外記念本郷図書館と呼ばれており、鷗外資料専門の展示室を併設しつつ、文京区立の公共図書館の一つとして設置されたものである。今日では組織の再編によって文京区立の公共図書館機能が本郷図書館として別の場所に移転したため、鷗外関連資料を専門とした本郷図書館鷗外記念室という文学館として再編されている。これは現在、施設老朽化に伴って改築整備の動きが起こっており、「(仮称)森鷗外記念館」の名称のもとにリニューアルの取り組みが進められている<sup>19)</sup>。

### 3.3 文学館の位置付け

以上をまとめると、文学館は博物館の一種に位置付けられるものが存在する一方、図書館を念頭に置いて形作られたものも存在しているため、明確に博物館や図書館という枠組みで線を引くことは難しいものになっていることが指摘できる。これは「2. 文学館の自己認識」で検討したような理念上だけの問題ではなく、「3.1 博物館の系統」や「3.2 図書館の系統」で確認したように、現場レベルや管理運営団体レベルの実際の取り組みにおいても、その運営形態に明らかな違いが見られるものである。

また、2007年には徳島大学の鳥羽耕史が、文学館という施設の役割を論じるなかで以下のような意見を述べている<sup>20)</sup>。

所蔵品の面から考えると、文学館にはおよそ三つの役割があるように思われる。それは系統だった図書資料を収蔵する図書館としての役割であり、生原稿などの貴重文書を収蔵する<sup>アーカイブ</sup>文書館としての役割であり、そして作家愛用の品など、一点限りの物を収蔵する博物館としての役割である。

以上のように、これまでの議論にも見られた博物館と図書館という役割だけではなく、文書館としての役割も見いだせるという指摘だが、管見の範囲では、文学館の機能の一つとして文書館という概念を持ち出したのは、鳥羽によるこの指摘が最初のものである。しかし、これはあくまで概念の提示のみに留まっており、文書館というアプローチでもって文学館の機能を詳しく検討した本格的な研究は現在のところ存在していない。とはいえ、文学館でも書簡や直筆原稿などの一点のみの手稿資料を扱っている以上、そこにアーカイブズ学の内容を用いることは有効と

考えられる。鳥羽の問題提起をもとにして、アーカイブズ学の方面からもより詳細な検討を進める意義はあるだろう。

以上の議論を踏まえ、筆者は「文学館という施設は博物館、図書館、文書館のいずれの領域にも含まれる」という考えを持っている。換言すれば、「文学館という施設は博物館、図書館、文書館のいずれかの領域に一意的に押し込めることはできない」という表現もできるだろう。

### 3.4 文学館認識の再検討

當山質問の前提となる拙稿において、筆者が“これまで多かれ少なかれ文学館という施設に関わりながらも、それについてほとんど考察の対象としてこなかった図書館情報学者や文学研究者は大いに反省し、その認識を改める時が来ているのではないだろうか”と述べたことの要点も、博物館の一種として位置付けられている文学館認識の現状に対し、図書館情報学の立場から疑問を差し挟もうとしたものである<sup>21)</sup>。そもそも長年にわたって博物館学の立場からしか文学館研究が行われてこなかったのは、「文学館は博物館の一種である」という捉え方があまりにも自明のごとく流布してしまったがゆえの弊害であると筆者は考えている。そうであるならば、文学館の対象領域を博物館、図書館、文書館のいずれかに押し込め、そこに固定化しようとするような議論の進め方は避けなければならない。なぜならばそのような考え方は、文学館についての広がりのある議論の展開に繋がるには到底思えないためである。

もちろん、例えば「文学館は博物館の一種であるのか？」という疑問が寄せられた場合、実際に博物館のように資料を展示する形で利用者に貴重資料を見せているという点で、「文学館は博物館の一種である」と回答することは確かに

間違いとは言い切れない。しかし、一方で図書館や文書館としての機能を見落とすおそれがある以上、「文学館は博物館の一種である」と無闇に断定してしまったり、図書館や文書館に言及せずに博物館という用語のみを強調したりすることは、できる限り避けたほうがいいだろう。現時点では、博物館という言葉に安易に縛られることがないように、図書館や文書館という視点も用意することを心がけ、議論の余地を大きく残しておくことが最善の対応になると考えられる。

### 3.5 博物館認識の再検討

一般に博物館的機能が強調されがちな今日では、事実上、「文学館は博物館の一種である」という一意的な認識に直結している傾向にある。そのような現状を放っておけば、博物館が容易に文学館の存在を対象領域として取り込み、そのステレオタイプな印象へと染め上げることで私たちの意識を鈍らせ、一面的な議論に硬直化させることになるだろう。筆者が懸念するのは、そういった硬直化した認識に依拠してしまうことによる、文学館に関する議論の停滞である。博物館の領域以外からも光を当てようとする意識を欠いたままだと、いつまで経っても「文学館は博物館の一種である」という当たり障りのない認識に変化が見られることはないだろう。文学館はこれまでに博物館学の領域に議論の場を見出してしまったという経緯があるゆえに、現状はその枠組みを打ち破ることができていない状態にあるように思える。筆者が以前に言及したように、「文学館は博物館の一種である」という思い込みで囚われることがいかに文学館に関する議論の可能性を狭め、博物館という枠組みのなかでのみ議論する羽目に陥ったのかをもう一度確認しなければならない<sup>22)</sup>。

今日では既に博物館学という学問領域が確

立されており、そのなかで日々研究を行っている博物館学者には、そのような文学館認識の変革作業はおそらく困難である。なぜならばそれは、自らの研究領域が考察対象とする以外にも文学館を論じる視点が存在することを認め、博物館学の限界領域を確認しつつ、博物館認識の再検討に取り組む作業となるためである。博物館学の領域でのみ考察対象となっていたこれまでの文学館研究の常識を打ち破っていくには、博物館学の外部からの刺激に頼るほかないだろう。そのような刺激を与えることで現状の認識を変えていくには、図書館情報学者が図書館情報学の領域のなかで、アーカイブズ学者がアーカイブズ学の領域のなかで積極的に文学館を研究対象として捉え、それぞれの学問領域内に引き込んでいかなければならない。

そのためにはまず、博物館という枠組み以外にも文学館という施設を捉える視点が存在することを、文学館を研究しようとする者があらかじめ認識しておかなければならない。今日の文学館研究では、そのような認識を共通理解としてお互いに確認した上で、博物館学、図書館情報学、アーカイブズ学がそれぞれの研究成果を持ち寄る形で学問的に協力し合い、学際的な視点でもって文学館に関する議論の拡張を模索する段階に進まなければならないだろう。

#### 4. 當山質問の再検討

さて、ここからは當山質問をさらに一歩進める形で検討を続けてみたい。

##### 4.1 繰り返される領域問題

これまでの本稿の論旨を踏まえれば、當山の提出した“文学館という施設は博物館、図書館、文書館のうちのどの領域に含まれるのか”という

疑問については、そもそも當山の意図するような断定的な回答が不可能なものであることが理解できるだろう。

筆者は以前に、文学館という用語には「文学博物館」と「文学図書館」の両方の意味が含まれていることを指摘している<sup>23)</sup>。前述したように、それは文学館の関係者同士でも議論の食い違いが起こってしまうほどに曖昧性が含まれた用語である。しかし、當山の問題意識はそういった曖昧性を無視して白か黒かの判断を迫るようなものであり、そこに中間色の存在を認めようとする見方である。當山の質問に見られるような、“いずれであるのか”と強い口調で文学館の対象領域の線引きを迫ることは、現時点で文学館という枠組みで結ばれながら協力体制を築いている施設同士の連帯意識を薄め、わざわざ「文学博物館」と「文学図書館」とに解体する事態に繋がりにくい。その線引きを無理に進めてしまうことは、文学館界にとっては決して良い結果にはならないだろう。當山の問題意識は一見すると素朴な疑問のようだが、“いずれであるのか”ということ突き詰めて考えれば考えるほど、ただでさえ論点が定まりづらい文学館研究の議論の共通基盤を崩しかねない事態を引き起こすことに繋がってしまう。

筆者が當山質問の前提となる小稿において、“これまで多かれ少なかれ文学館という施設に関わりながらも、それについてほとんど考察の対象としてこなかった図書館情報学者や文学研究者は大いに反省し、その認識を改める時が来ているのではないだろうか”と述べたのは、文学館は博物館学だけではなく、図書館情報学からも積極的に研究対象としなければならないという意図を持って執筆したものである<sup>24)</sup>。そこには、博物館学から切り離す形で図書館情報学の領域に引っ張り込むという意図を含めたつもりはな

い。一般に博物館の一種として認識され、“博物館学しかまともに研究してこなかった”からこそ筆者は図書館としての機能を強調し、図書館情報学の立場からも研究を進めることで、それら学問同士の協力体制を構築する必要性を問うていることは改めて確認しておきたい<sup>25)</sup>。しかし、そういう目的で書いた文章を公表した後においても、依然として“いずれであるのか”というような文学館の領域を問うような文学館研究の草創期の疑問が繰り返し寄せられ、そしてそこに明確な線引きが強く求められてしまうこと自体に、この領域問題の根深さを感じ取ることができる。

#### 4.2 三分法の限界

おそらく、當山の指摘は文学館という施設に関わっていない第三者の立場からの率直な感想であり、社会一般の素朴な疑問を代表しているものと考えられる。つまり、普段から文学館という施設の存在を意識していない者が文学館という事例に触れたとき、自然と沸き起こってくるような初歩的な疑問であり、一般レベルの文学館認識も當山の指摘とそれほど変わることはないだろう。それは言い換えれば、文学館を取り巻く社会にはそれを博物館、図書館、文書館のいずれかの領域に属させようとする見えない圧力が存在しているという推測もできる。

その見えない圧力は博物館、図書館、文書館という三つの施設こそが安定的で絶対化された形態であるという認識の上に成り立っており、文学館のような機能も理念も役割も中途半端であり、満足に定義付けもままならない施設の曖昧な存在感を決して許容してはくれないように思える。當山の発した“いずれであるのか”という言葉の裏には、無意識のうちに博物館、図書館、文書館の三つの形態を上位のものとして位置付け、文学館の存在を下位に見るといった認識が暗に含

まれていることには注意しておきたい。博物館、図書館、文学館の三分法の思考を前提に話を進めようとする限り、文学館をそのいずれかに押し込めようとする意見は今後も繰り返し寄せられることになるだろうが、その考え方には、そもそもの理念や運営形態の点で限界があることは先に述べたとおりである。當山の素朴な疑問は、そのような単純ながらも本質的な問題点を明らかにしている。

「3.4 文学館認識の再検討」「3.5 博物館認識の再検討」で論じたことを再度強調して述べるが、文学館という施設を論じる際には、安易に博物館の領域に落とし込むのではなく、図書館や文書館という枠組みを含め、より多様な観点から捉えなければならない。そうであるならば、筆者は當山が感じたような問題意識がまるで決まり文句のように沸き起こってしまうような、文学館を取り巻く社会の在り方こそがむしろ問題であると考えられる。言い換えれば、當山に冒頭のような疑問を抱かせるような、文学館を取り巻く社会そのものに構造的な問題があると考えられる。それらが沸き起こる根本的な要因を解体しない限り、次は當山以外の誰かが同じような質問を寄せることで、文学館に関する議論をふりだしに戻そうとするだろう。そしてそれは、また別の者によって何度でも繰り返されるおそれがある。

文学館の領域を“いずれであるのか”と明確に領域の決定を迫る當山のような質問の仕方は、表現を変えれば、「博物館、図書館、文書館のいずれかの形態しか文学館の存在基盤を認めない」という考え方を前提とするものである。文脈こそ異なっているが、これは“文学館は博物館の一形態と見なすのが妥当であり、わざわざ図書館の一形態として捉えることは無理があるように思える”という意見を寄せた拙稿の査読者と同様の思考に陥っていると言えるだろう<sup>26)</sup>。む

しろ筆者としては、「いったいなぜ文学館を博物館、図書館、文書館のいずれかの領域に一意的に決めなくてはならないのか？」と當山に問い返してみたい思いに駆られる。

#### 4.3 新しい文学館認識の確立

筆者が以前に指摘したように、本格的な文学館研究が始まってから既に十数年が経過している<sup>27)</sup>。それにも拘わらず、文学館という用語が持ち出されると、即座にその領域に対する疑問が出される現状は、これまでの文学館研究の成果が世の中にうまく伝わっていないことの証左である。本来であれば、このような文学館研究の初歩的な疑問が繰り返して出されないほどに、文学館という存在やそれが抱える問題点、そして何らかの研究成果が世の中に対して主張されていなければならなかったはずである。今日、図書館という用語からは図書館が、博物館という用語からは博物館が連想されるのと同じように、文学館という用語からは文学館そのものが容易に想起されるような世の中にならなければ、文学館研究の発展は到底望めない。それどころか、現状の在り方を変えようとしないう限り、いつまで経っても「文学館は博物館の一種である」という世の中の文学館認識に変化が訪れることはないだろう。

筆者としては、當山質問 A のような文学館という施設の対象領域の線引きにはそれほど意味があるとは思えない。前述したように、そのような分類作業を厳密に行おうとしても、それぞれの理念の違いがあるために一意的に決定することはできないし、仮にそのような分類作業を行ったところで、結局は文学館に関する議論の幅を狭め、可能性を小さくしてしまうだけである。現実的に図書館としての機能を目指そうとする理念を持つ文学館があったとしても、それが博物

館としての機能を疎かにしてもよいという理由はない。その逆もまた同様であり、博物館としての機能を目指そうとする理念を持っている文学館であっても、図書館的なサービス提供の期待は常に寄せられることになるだろう。ならばむしろ、文学館という施設を文学館そのものとして直視し、その機能面を幅広く見据えた上で、個々の性質の違いを博物館学、図書館情報学、アーカイブズ学それぞれの文脈のなかに照らし合わせて検討を行ったほうが、より前向きな成果が得られるはずである。

もちろん、博物館学の領域に飛び込むことで博物館学者と意見を交えることは重要である。しかし、それはあくまで文学館の持つ博物館的機能を検討するために博物館学の議論に加わるのであり、文学館にはそれだけではない機能も含まれるという意識を欠いてしまってはならない。別の言い方をすれば、文学館を総合的に研究していくためには、文学館関係者や文学館研究者らが単純に博物館学の土俵に上るだけで安心するようなことがあってはならないとも言えるだろう。そしてまた、図書館情報学者も積極的に文学館研究に関与することで文学館を図書館情報学の領域に引き込んでいかねばならないし、アーカイブズ学者にもそれと同様の期待が寄せられることになる。今日の文学館研究においては、「文学館は博物館の一種である」というような単純な思い込みからは解放され、新しい文学館認識を確立しなければならない時期が訪れているのではないだろうか。

## 5. まとめ

### 5.1 本稿の結論

現在に至るまでの文学館認識の乏しい社会状況においては、特に文学館研究の草創期の

段階においては、消去法的に博物館学の領域に歩み寄る以外に探るべき方法がなかったと考えられる。文学館という概念が博物館、図書館、文書館の後発の施設である以上、これまでの議論が先行する学問が確立してきた土俵上、特に博物館の領域に引きずり出されてしまうのは仕方のないことだったのだろう。そうであるならば、文学館研究という概念が今日において一般に確立されていない以上、私たちはまず以下の点を確認しなければならない。

①現場レベルの認識の相違

文学館は、そこで仕事をしている現場の関係者同士でもその認識に相違が見られるほどに、それぞれの立場によって捉え方が異なる不安定な存在である。

②研究者レベルの問題化不足

文学館は、それ単体で学問的な位置付けや理解を得るほどの存在感や活動の方向性を示すことができていない。そのため、博物館学、図書館情報学、アーカイブズ学のいずれの立場からも体系的な研究方法が確立されておらず、まとまった研究成果も提出されていない。

③一般レベルの無理解

文学館は、既存の社会教育施設(博物館、図書館、文書館など)の後発の概念であり、それらのいずれかの領域(特に博物館)に容易に取り込まれてしまうほどに世に知られていない存在である。

①はそれぞれの文学館の理念や運営形態の違いに起因するものである。これを解決するためには、文学館関係者同士が文学館という大きな枠組みを見据えることを前提とし、それぞれの立場を尊重しながら共通認識を構築していくた

めの絶え間ない話し合いが求められる。この取り組みについては、既に全国文学館協議会という会合の場が作られたことにより、長年にわたって討議が続けられているため、今後も積極的な議論の積み重ねが行われることが期待できる。また、②は研究者レベルで文学館そのものを研究対象として認識しようとする機運が確立されていないことに原因がある。これに関しては博物館学者だけでなく、図書館情報学者やアーカイブズ学者など、文学館に関連のある学問領域の研究者らの意識改革が求められることになる。そして、③は文学館関係者が自らの活動の特異性を広く社会一般に主張し切れていないことを意味する。これについては、文学館関係者と文学館研究者の両方の立場から積極的に発言を行い、それらを世の中に広く普及していかねばならないだろう。

以上を踏まえると、文学館研究の今日的な課題としては、まずは博物館、図書館、文書館のいずれの立場も尊重しなければならないという認識を広く一般に確立することが求められる。しかし、それはあくまで議論の初期の段階に留めておくものであり、その後は文学館という用語のみでその性質を表現し、機能や役割が理解されるような社会を目指していかねばならないだろう。現時点で私たちができることは、まずは博物館、図書館、文書館という三つの領域を意識し続けることでしか文学館の対象領域を確立できないということを理解することである。言い換えれば、どこか一つの領域に押し込めようとする文学館を取り巻く社会からの見えない圧力には徹底的に抵抗し、狭い議論の場から抜け出すための格闘を続けることである。そして三つの領域を意識した上で、文学館関係者にとっても、文学館研究者にとっても、広く社会一般にとっても有効となる言葉を模索する取り組みを絶えず続

けていかなければならないだろう。

## 5.2 今後の展望

博物館、図書館、文書館はそれぞれの英語表記の頭文字を取り、一般に MLA という呼び方がされているが、これまでの議論を踏まえてみれば、文学館という存在は「博物館、図書館、文学館の三つの領域に分類したうえでその協力を図る」というものではなく、既にそれらが一体化された施設と評価できることになる。そのような見方をすると、まるで MLA の良いとこ取りのような印象を受けるが、実態としてそれは、MLA のどの方向を向いても中途半端でまともに相手してくれない状態に陥る可能性が高いということである。議論の基盤を MLA のどこに置けば分からないということは、むしろそれは文学館をかえって苦しい立場に追いやっているはずである。

極論を言うようだが、本来の役割だけを考えるならば、図書館は図書館としての役割を、博物館は博物館としての役割を、文書館は文書館としての役割を実現すべく、まずはそれぞれの施設に固有の問題に関する議論を突き詰めていけばいいことになる。それぞれの領域のなかで求められている役割を全うするために確固たる運営基盤を確立し、自らの足場をしっかりと固めた上で、MLA の連携を図る議論を進めていくことになるだろう。しかし、文学館は常に MLA のすべての役割を一体化して考えていかなければならない存在である。これは一般的な博物館、図書館、文書館に比べ、むしろ人的にも金銭的にも労力的にも厳しい事業となっているはずである。一方では博物館のように博物資料の展示を考えつつ、もう一方では図書館のように所蔵資料の公開や OPAC の整備を期待されている存在である。文学資料を専門的に扱う文学館という施設には、それだけ幅広く多彩な仕事が必要

求されている。

MLA の連携を図ろうとする議論以前に、あらかじめ MLA のすべての機能を念頭に入れなければならないという文学館の立場は、これまでの活動のなかでどのような問題点を表面化させてきているのだろうか。あるいはそのような状況を改善するために、現場レベルではこれまでどのような工夫や取り組みを行ってきたのだろうか。これらの問題点については、今後の文学館研究によって少しずつ明らかにしていかなければならないだろう。

## 5.3 文学館研究の「今後」とは

ところで當山は、“文学館の今後について考えるポイント”として冒頭の疑問を提出したと述べている<sup>28)</sup>。筆者は當山の発言に見られる「今後」という表現が、さり気ないようだが重要な示唆を含んでいるものと見なしている。

考えてみれば、現在は1995年の全国文学館協議会の設立から既に十数年が経過しているわけである。それだけの時間をかけただけの文学館研究の蓄積があるはずであり、実際にそれは『全国文学館協議会会報』という逐次刊行物として形になっている。本稿でも言及したように、當山の抱いた疑問やそれに対する回答なども、既に過去の全国文学館協議会における議論のなかに見られたものである。では、當山の質問の最後に記された「今後」とは、果たしていつやって来るのだろうか。

全国文学館協議会の議論に加わっていない外部の研究者の立場から勝手なことを言うようだが、本来であれば文学館研究の「今後」とは、當山が疑問を寄せた2009年3月の時点での将来的な希望ではなく、既にそのときこそが「今後」の時代に該当していなければならなかったと考えられる。全国文学館協議会という団体が1990

年代半ばから活動を開始し、文学館関係者の間で十数年間にわたって積み重ねてきた議論がまったく顧みられることなく、當山という一研究者が“文学館の今後について考えるポイント”として改めて世に問うたことは、この十数年間の文学館関係者の取り組みがまったく世に知られていないことを意味する。つまり、文学館について十数年の時間をかけて議論を行っているにも拘わらず、「今後」が訪れる気配を一向に感じることができないのである。十数年前の時点で期待されていた文学館の「今後」が、今日においても引き続き同じような状態にあることは、現在の文学館研究の情報流通の在り方にどこか問題があるように思える。

#### 5.4 中村稔の「自負」について

2005年の時点で、中村は以下のように述べている<sup>29)</sup>。

全国文学館協議会は年一回の総会の他、毎年一回、総務情報、資料情報、展示情報の各部会を開催している。各部会に先立って各館から意見を求め、当日は四館ほどが報告し、その上で、問題点を共同討議し、それらの記録を会報として発行している。三十冊に近い会報はいわば「文学館学」の情報宝库であると私は自負している。

前項で指摘したように、當山が2009年3月に冒頭の疑問を“文学館の今後について考えるポイント”という形で世に問うたという行為そのものを問題化して考えてみれば、中村の抱いている「自負」とは何という空虚なものなのかと感じざるを得ない。なぜならば、全国文学館協議会関係者が広く世の中に対し、自らの研究結果や議論の成果を積極的に公開していないという事実が

存在するためである。そのことは、“「文学館学」の情報宝库”であるはずの『全国文学館協議会会報』が、原則として会員館の間だけに流通する灰色文献であり、一般の人が気軽に閲覧することができるような資料ではないことから明らかである<sup>30)</sup>。そのため、全国各地の公共図書館のOPACで検索されることはなく、さらには国立国会図書館への納本もなされていないため、NDL-OPACの雑誌記事索引でも検索されないという状況にある。また、NACSIS Webcatでも同様に検索されないことから、全国各地の大学図書館でも所蔵が確認できない状態となっている。図書館のOPACで検索されない状態にあるということは、事実上、文学館研究の主要な成果が世の中には存在していないものと見なされているに等しいということになる。このような状況は、まさしく“「文学館学」の情報宝库”が「宝の持ち腐れ」の状態になっていることを意味している。

これまで、全国文学館協議会はいったいどれだけの情報を世の中に対して発信してきたのだろうか。世の中に発信したつもりになっていた情報は、文学館関係者内部での狭い範囲でしか流通していなかったのではないだろうか。本来ならば、国立国会図書館への納本は当然行すべきとしても、できればさらに各都道府県立図書館に対しても納本するような取り組みを積極的に推し進め、世間一般に対する文学館への理解を図るよう努めるべきではなかっただろうか。少なくとも、国立国会図書館の雑誌記事索引で検索されないという現状は、文学館研究の将来にとっては致命的な欠陥である。現在の問題意識を世に広める努力もなしに文学館研究の機運が高まることはないだろうし、その研究領域が発展することなどはますます期待が持てないだろう。広く世の中に発信しようとならないような情報

は、いくら当人たちが「文学館学」の情報の宝庫”などと公言したとしても、事実上それは無きに等しい扱いを受けることになる。

そのような状況が依然として続いているならば、現在の時点からでも文学館そのものを研究しようとする研究者人口を増やし、問題意識を共有できる賛同者や理解者を増やすことに努めていかねばならないだろう。そのような取り組みは、一向に社会的な理解が進まない文学館の現場を預かっている文学館関係者の責務であるように思う。十数年にわたって蓄積してきた“文学館学”の情報の宝庫”を、文学館関係者間のコミュニティ内部で閉ざしてしまわずに、それらを広く世の中に訴えかけることで、何かしらの建設的な意見の還元を期待した方が、結果的には文学館界にとって最良の結果をもたらすことになるのではないだろうか。

## 6. おわりに

當山は冒頭の疑問に加え、さらに以下のような意見を出している<sup>31)</sup>。

それぞれに設立の趣旨や理念がちがいます。まず、そのあたりを整理してみるのが、重要ではないかと考えます。

このような指摘については當山の言を待たずとも、先に引用した豊泉の指摘のように、既に1996年の時点で問題提起がなされていることが確認できる。また、1997年には中村が以下のように述べているように、文学館関係者の間でも長年にわたる課題となっている<sup>32)</sup>。

文学館が設立される動機はさまざまである。地方の有志の地道な運動が自治体等

に文学館の設立をうながすに至ることもあり、自治体が観光目的で設立を計画することもあり、ふるさと創生資金の使途として郷土ゆかりの文学者の顕彰を考えるばあいもあり、たまたま遺族から遺稿、遺品類の寄贈を受けたことが動機となるばあいもある。(中略)

実際、どの文学館も多くの問題をかかえている。財政はもとより、施設、設備の面でも、文学館学芸員というべき専門職員の養成、選任についても、資料の収集、保存、整理等についても、展示についても、あらゆる面で今後、改善をはかるべき点も多いし、文学館の間で協力しあっていくべき点も多い。全国文学館協議会はそういう問題を話し合い、改善と協力の端緒をさぐる場として、日本近代文学館がよびかけて、活動をはじめたのである。

以上のように、十数年にわたって関係者の間で問題提起はされていつつも、結局は文学館の通史をまとめようとするような文学館研究者が世の中に出てこなかった状況が続いていたわけである。問題提起がされていても、結局は何の議論も進まない状況であったため、既に十数年の時間が経過しているにも拘わらず、當山が“そのあたりを整理してみる”ことの重要性を改めて問い始めたのは至極当然のことだろう。これは文学館研究という概念自体が比較的新しいものであり、そしてまた、文学館研究者が長年にわたって不在だったという理由があるが、ひとまずはこれが今後の文学館研究における最重要の検討課題となるだろう。

現在、筆者自身はこのような文学館史の記述の重要性に関心が移り、その研究に取り組み始めている。個人的な学問的背景は図書館情報学であるため、筆者としてはあくまで図書館史の

流れのなかに文学館を位置付けたいという思いがある。それは言い換えれば、現時点での筆者の力量では、図書館情報学的のアプローチから迫ることが精一杯の対応になるという事情もある。現在、個人的には博物館学の知識を新たに身につけることの必要性を感じており、いずれ腰を据えてそれを学ぶつもりでいるが、博物館史の流れのなかに文学館を位置付けようとする取り組みについては、博物館についての研究を進めるなかで、筆者と同じように文学館についての問題意識を抱えるようになった博物館学の研究者からの反応を待ち、相互に意見交換を行う形で、何らかの協力を得たいと思っている。

既に半世紀を超える文学館史の記述には膨大な時間と労力がかかることが予想されるが、文学館草創期の関係者が次々と鬼籍に入っている今日においては、早急に調査研究を進める必要性を感じている。

### 謝辞

本稿は筆者自身による文学館研究の展望を述べた論考、そしてそれに対する當山日出夫氏の疑問を踏まえて執筆したものである。本稿執筆の直接のきっかけを与えてくださった當山氏には深く感謝申し上げます。また、今回の議論の発端となる拙稿の執筆機会を与えてくださったACADEMIC RESOURCE GUIDE (ARG) 編集長の岡本真氏にも、この場を借りて改めてお礼を申し上げます。

### 註

1) 岡野裕行. “「図書館としての文学館」試論：文学館研究の確立とウェブの活用構想”. 文学館研究会.  
<http://www.literarymuseum.net/paper/arg-363.pdf>, (参照 2009-10-10).

- 2) 當山日出夫. “文学館研究会と MLA”. やまもも書齋記. 2009-03-10.  
<http://yamamomo.asablo.jp/blog/2009/03/10/4165282>, (参照 2009-10-10).
- 3) 岡野裕行. 日本近代文学研究における文学館の役割:「全国文学館協議会」加盟文学館の発行物を中心に. 筑波大学, 2006, 博士論文.
- 4) 豊泉豪. 総務に関連して検討すべき事項について. 全国文学館協議会会報. 1996, no.1, p.94-95.
- 5) 中村稔. 文学館の使命:図書館的機能と博物館的機能. 全国文学館協議会会報. 2001, no.17, p.8-9.
- 6) 同上.
- 7) 中村稔. “後記”. 文学館感傷紀行. 新潮社, 1997, p.337-342.
- 8) 豊泉豪. 「随想—文学館学序説のためのエスキスのために〈総務篇〉」を読んで:博物館としての文学館. 全国文学館協議会会報. 2001, no.18, p.30-33.
- 9) 生田美秋. 博物館としての文学館:「随想—文学館学序説のためのエスキスのために〈総務篇〉」について. 全国文学館協議会会報. 2001, no.18, p.34-40.
- 10) 岡野裕行. 図書館情報学は文学資料の諸問題をどう考えていくか. 勉誠通信. 2009-08-17, no.11, p.7-9.  
<http://www.bensey.co.jp/webpr/011.pdf>, (参照 2009-10-10).
- 11) 世田谷文学館. 世田谷文学館:文学を体験する空間. <http://www.setabun.or.jp/>, (参照 2009-10-10).
- 12) せたがや文化財団. “設立趣旨”. 財団法人世田谷文化財団.  
<http://www.setagaya-bunka.jp/about/shu>

- shi.html, (参照 2009-10-10).
- 13) 前掲 9).
- 14) 古河文学館. 古河文学館ホームページ.  
<http://www.city.ibaraki-koga.lg.jp/bungaku/index.html>, (参照 2009-10-10).
- 15) 岡野裕行. “地方自治体の施設間における地域資料認識の差異: 古河図書館, 古河歴史博物館, 古河文学館を事例として”. 第8回情報メディア学会研究大会発表資料. 東京, 2009-06-27. 情報メディア学会, 2009, p.27-30.
- 16) 日本近代文学館. 日本近代文学館のホームページ. <http://www.bungakukan.or.jp/>, (参照 2009-10-10).
- 17) 大久保乙彦. “出納の得: 小図書館の幸福”. 追悼・大久保乙彦. 大久保和子, 1990, p.20-26.
- 18) 文京区立図書館. 本郷図書館鷗外記念室.  
<http://www.lib.city.bunkyo.lg.jp/ogai-kinen/index.html>, (参照 2009-10-10).
- 19) 文京区教育委員会. “「(仮称) 森鷗外記念館」整備検討委員会報告書”. 文京区「(仮称) 森鷗外記念館」整備検討委員会報告について.  
<http://www.city.bunkyo.lg.jp/var/rev0/0008/3920/kentouiinkaihoukoku.pdf>, (参照 2009-10-10).
- 20) 鳥羽耕史. 文学館の役割: 貴司山治展とブングクな時代展をめぐって. 日本近代文学. 2007, no.76, p.339-342.
- 21) 前掲 1).
- 22) 前掲 1).
- 23) 前掲 10).
- 24) 前掲 1).
- 25) 前掲 1).
- 26) 前掲 1).
- 27) 岡野裕行. 文学館研究の転換期: 全国文学館協議会の発足と文献数・文献内容の変化. 日本図書館情報学会誌. 2008, vol.54, no.4, p.270-287.  
<http://www.literarymuseum.net/paper/jslis-54-4.pdf>, (参照 2009-10-10).
- 28) 前掲 2).
- 29) 中村稔. “文学館・全国文学館協議会について”. 全国文学館ガイド. 全国文学館協議会編. 小学館, 2005, p.206-207.
- 30) ただし, 非会員であっても全国文学館協議会事務局からの直接購入により, 一冊 3,000 円で入手可能となっている。しかし, 同会報は公式サイト上で紹介されているのみで, その存在を把握するための情報が非常に少ないことに加え, その値段も決して安価とは言えないため, 閲覧に至るまでの敷居が高めに設定されている。参照は以下の文献による。全国文学館協議会事務局. “会報の発行”. 全国文学館協議会.  
<http://www.bungakukan.or.jp/kyougikai/seturitu.htm#kaihou>, (参照 2009-10-10).
- 31) 當山日出夫. “文学館とスロヴェニアのことなど”. やまもも書齋記. 2009-03-11.  
<http://yamamomo.asablo.jp/blog/2009/03/11/4167725>, (参照 2009-10-10).
- 32) 前掲 7).